

教室の風景—賢治と学校

山本昭彦

二十世紀の日本では
学校といふ特殊な機関がたくさんあって
その高級な種類のなかの青年たちは
あんまり自分の勉強が
永くかかってどうやら
若さもなくなりさうで
とてもこらへてゐられないので
大てい椿か鯛の油を頭につける
[…]

「東京」詩篇の中の、「丸善階上喫煙室小景」の一節である。¹⁾ この詩は「一九二八、六、一八、」の年記を持っている。賢治が花巻の農学校を辞めたのは大正15年(1926)3月末日であるが、その二年後、三原、東京へ行った時の印象を元にした詩である。「学校」への失望がはっきり示されているが、同時に都会文明のあり方の一面を看守出来たことへのある種の安堵感と諦めも垣間見えるような詩である。同じ時に「自働車群夜となる」という詩もあり、歌舞伎座前の自動車の列への反感も書き残されている。物質的な都会文明、外面的な都会文化、そしてそれを推進し、支える学校への違和感、裕福で生活から遊離している感じの都会の若者への反感、地に足が着かず、外国のものをただ採り入れれば良いといった感覚への反感を見て取ることができる。

賢治の同時代の「学校」に対する違和感は組織や制度に対するものであったり、そこで教えられている中身であったり、「教室」という閉じた空間で、教師が一方的に喋り生徒はひたすらおとなしくしてはならない、という教え方、画一的な授業への違和感であったりする。こうした違和感や疑問を、賢治は童話、詩、書簡、創作メモなど様々な形で書き残している。²⁾ ここでは賢治における「学校」への愛着と反感、その愛憎屈折した思いを作品に辿ってみた

- 1) ちくま文庫版『宮沢賢治全集』第3巻、p.434。以下、賢治作品からの引用は最も普及していると思われるこの版により、「3-434」のように略記する。なおこの全集の第8巻は10刷以降、新たに発見された原稿を収録した(p.450-452)ため、p.450後半以降は2頁、p.635以降は3頁、以前の版とはずれている。
- 2) 賢治の書簡は、そのまま作品として読みたくなるような魅力的なものも多いが、ただ、意図的なのかどうか、ちょうど農学校教師時代の書簡は残されていない。そのことの検討を行うためにはさらに伝記的な事象に踏み込まなければならないだろうが、現在の無数にある研究をふまえて数次にわたって周到に編集されてきた校本全集に拠っても、この「空白」(の謎)は埋められるかどうか現在のところ定かでないため、今後の課題としたい。

い。学校という存在の持つ矛盾、賢治自身の使命感、東京と地方という軸を常に考えていた賢治の葛藤、を示すことが出来るだろう。

1. 賢治作品における教室風景

「風の又三郎」と「銀河鉄道の夜」という良く知られた二つの大きな物語がいずれも「教室」の場面に始まり、それでいながら物語は「教室」内には終わらないこと、教室にとどまってはいることはもっとも印象的である。³⁾

「銀河鉄道の夜」では銀河の仕組みを説明してくれる先生を主人公は眠そうに聞いている。しかしこの物語では学校の先生は冒頭にしか出てこない。また、「風の又三郎」でも子供達は先生を恐れていたたり、怖がっていたり、と少し距離がある。もっとも、ごく普通の先生だった「風の又三郎」の先生は物語の最後ではへんなおとなへと「変質」してしまう印象もある。⁴⁾ まずは教室を回想する言い方をみてみよう。

「鳥をとるやなぎ」では「尋常四年の二学期のはじめ頃」(5-403)の教室が描かれる。しかし子供たちは「エレキの楊の木」が気になってしかたなく、授業は上の空で(授業についての描写も一切なく)、意識は教室から外へと動かし、授業が終わり次第、「私」と友人藤原慶次郎は舞台を外に移す。「慶次郎」は作中人物だが、藤原健次郎は寮で同室だったこともある実在の友人だった。賢治とは親しかったが若くして病没した。14歳の賢治が花巻温泉郷・大沢温泉でのいたづらを得意げに報告する手紙が残っている。⁵⁾ 友人「藤原慶次郎」との日々を語り手「私」が後から振り返り、回想するスタイルで語るものには「谷」と「二人の役人」もあり、「藤原慶次郎もの」とよんでもよいだろう。この二つの物語では最初から教室は出てこなく、「谷」は放課後の子供たちの冒険であり、「二人の役人」は野原の中が舞台になる。偉い役人(東北長官一行)が遊びに来るといので、その機嫌を取ろうと栗の実やきのこを事前に用意しているおとなたちがいる。子供たちは好奇心と捕まらないかという不安でびくびくしているが、このお膳立てに巻き込まれ、偽善的な接待の実態を知ってしまう。教室は出てこないが、立て札もすらすら読めるようになっている「尋常五年生」(5-394)のある日曜日の話で、早くもおとなたちの表面性、保身への不信感とあざけりが淡々と回想されている。

賢治の童話では、教室は寓意的に語られる。「みじかい木ペン」は小学校の教室での子供たちの様子が魅力的に語られる。キッコは「8の字を横にたくさん書く」ことに魅入られたように熱中している。この、子供の筆跡、というか手の動きというか、活字にはない「文字」まで、本文には表記されている(6-287)。子供と文具、その文具が生み出す文字というか形(8が連続した模様)への執着、これはまさに知的好奇心の始まりであろう。それを賢治は活写する。子供たちが「木ペン」と呼んでいる鉛筆だが、ある時キッコはこれを持っているだけで、鉛筆が勝手に動いてだまっけてもどンドン計算も出来てしまうことに気付く。この鉛筆をなくすと、先生の出す問題にも何も答えられなくなってしまう。子供にとっては夢を叶えてくれるよ

3) 高橋世織「風言語のミュージカル(宮沢賢治『童話集 風の又三郎 他十八篇』)」、大岡信ほか編『近代日本文学のすすめ』、岩波文庫別冊13、1999。所収、p. 267)に指摘がある。

4) 拙稿「風の又三郎は本当に学校を去ったのか?」、『人間・文化・社会』小池稔他ほか著、岩手大学人文社会科学部・地域文化基礎研究講座刊、1997.3. p. 203-226。

5) 書簡番号 0a, 1910.9.19. 付、藤原健次郎宛。

うな、ファンタスティックな小道具を扱う童話だ。物語としては慢心に対する諫めという教訓的な物語にもなりそうだが、未完である。

賢治の物語に出てくる不思議な学校には、人間が営むものだけでも「フウフィーボー成人学校」や「フランドン農学校」「イーハトーボ農学校」があり、ちらと姿を見せるだけのものも数えれば、「麻生農学校」「コンテクカット大学校」や「ウルトラ大学」までである。⁶⁾「ひかりの素足」では雪の中で峠を越えることが出来なかった樵夫が、「うすあかりの国」で兄と別れて入らなければならない先は、(天上の)「学校」(5-267)である。ここは、博物館と図書館とチョコレートが列記されている理想郷とも言えるが、一郎は弟を守ったことを褒められながらも、「も一度あのもとの世界に帰るのだ。[...]よく探してほんたうの道を習へ。」と、「夢」の世界から現世に戻され、目覚める。

このように多様な学校のあり方、これは単に子供が行くべき場所、として語られているだけのことであろうか？あるいは理想の場所のアナロジーとして語られているのだろうか？

学校も賢治の物語の中では実に多様で、その豊かさには圧倒されるが、動物たちが主人公となっている学校としては、名前のついているものだけでも「洞熊学校」「茨海小学校」「フェリーズ小学校」などがある。⁷⁾

「洞熊学校を卒業した三人」は、洞熊先生の学校で三年間競いあった蜘蛛、なめくじ、狸の三人の物語で、表面は仲良く謝恩会などもするが、張り合っている。それぞれ他の動物や虫を騙して食べ、強くなっていくが、次々に腐って死んでゆく。お腹をすかせた蜘蛛は「小さな二銭銅貨位の網」(7-72, 77, 88, 繰り返す)を作り、あぶの子供、かげろうを容赦なく食べ強くなり、結婚もする。が最後は巣を作り過ぎ、かかった獲物が腐り蜘蛛も腐って死んでしまう。なめくじは「学校も出たし人がよくて親だといふ林中の評判だった」(7-77)が、親切ごかしに对应して相手を溶かして食べてしまう。狸はありがたい山猫大明神の念仏を唱えたと騙し、慕ってくる善良な動物たちを食べてしまう。しかし食べた物が腹の中で伸び、ボーンと腹が裂け、死ぬ。かつては「点数の勘定を間違」(7-70)えて生徒に悔しい思いをさせた洞熊先生は、今はあくびをしながら三人の子供の死を悼み、来年度の生徒としてどぶ鼠を追いかけて続ける。

この物語の原型、最初期の童話「蜘蛛となめくじと狸」でも、三者とも最後には腐ったり、溶けて流れる。そこまで「地獄行きのマラソン競争」(5-25)をしていたのだが、語り手は「私は三人がならんでかける所も見ませんし学校の試験で一番二番三番ときめられたことも聞きません」(5-9)と言う。張り合うこと、競争が主題には違いないのだが、ここには先生はいないし、学校の比喩もこの箇所のみである。賢治は後になって、学校、とりわけ、ひょうひょうとした悪辣な洞熊先生も加えた形で書き直しているのである。

この物語の学校は何かを教えるところだったのだろうか？ 生きること？ 弱肉強食の摂理？ 賢治の童話には必ずしも教訓的なばかりでなく、細部の面白さはあっても、結末が荒っ

6) 「麻生農学校」は「茨海小学校」(5-420)、「コンテクカット大学校」は「葡萄水」(6-280)や「ウルトラ大学」は「フランドン農学校の豚」(7-144)に出る。

7) 他に、「きつねの学校」(「雪渡り」)、「鼠の学校」(「ツェねずみ」5-145)。網羅的に調べて挙げるわけではないが、覚えのために記しておく。「紫紺染について」には「工業高校の先生」(6-420)、他に、「クンねずみ」は猫大将に頼まれ、猫の子供の算術の家庭教師となる(5-164)。しかし猫が覚えたのは鼠を捕ることであり、クンねずみ先生は食べられてなくなる。先生と言っても学校とは無関係には、「毒蛾」の「撃剣の先生」(5-381)があり、「北守将軍と三人兄弟の医者」(8-210)もあり、「榎の木大学士の野宿」では大学士は先生と呼ばれている(6-227)。

ばいものもある。最後に「猫大将」や「猫の大王」がデウス・エクス・マーキナーとして出てきて、一気に踏みつぶすように片をつける、といった物語である。これらの物語には賢治の怒りが直截に現れているのかもしれない。しかし、そもそも「学校」とは何をすところなのか、を考えさせる。

こうした物語りの一つに「鳥箱先生とフウねずみ」がある。ここには建物、組織としての学校はないが、「先生」だけはいて、この先生が「教えること」のオブセッションに囚われていて、それを皮肉る物語とも読める。この物語での「先生」は鳥かごと言うよりは鳥箱である。子供を囲い込み、閉じこめる空間。ここに「一疋の子供のひよどり」が入れられる。中でバタつくのを叱るうちに「とりかごは、急に、ははおれは先生なんだな」と気付く(5-149-150)。「おれは先生なんだぞ。[...]お前を教育するんだぞ。」(5-150)。ひよどりは先生を嫌って暮らすが餌を忘れられ死ぬ。次々と入れられたひよどりは、腐った水で赤痢になったり、空や林が恋しかったり、先生が油断をして睡っているあいだに乱暴な猫が来て、つかんで行ってしまい、次々と死ぬ。鳥箱先生は信用をなくし、物置へ移される。しかし今度は鼠の母親に頼まれ、鼠の子フウの「教育」を始める。誤魔化しや空威張りを感じたのかフウは矯正に抗う。フウは自分の友だち(しらみ、くも、だに、むかで、けしつぶ、ひえつぶ、おおばこの実)を持ち出して自分の弁護をしようとするが、先生は「そんなつまらないもの」と較べてはいけない、と「もう少し、りっぱなもの(猫、犬、獅子、虎)とのつきあいを勧める。「お前は、また、そんなつまらないものと自分をくらべてるが、それはよろしくない。お前はりっぱな鼠になる人なんだからそんな考はよさなければいけない。」(5-154) 一見もっともな言葉ではあるが、母親を呼び出して怒っているうちに、「まるで、嵐のやうに黄色なものが出来て来て、フウをつかんで地べたへたゝきつけ [...]」る。この猫大将の、「ハハハハ、先生もだめだし、生徒も悪い。[...]」と云ひました。」(5-155)で物語は唐突に終わる。だめな先生の妙な威張り方への強烈な諷刺としては痛快である。が、身の丈を知っている子鼠があっさりつぶされるところは、何とも後味が悪い。この超然とした猫はそのまま「猫の事務所」の最後に出てくる獅子のようだ。賢治の教師に対する怒りがもはや止めようもなく誰彼の見境なく爆発している。

だめな先生を主題としたものとしては、「創27」と整理された、「西洋音楽の家元」の構想メモも残っている(10-442)。どうやら知識も実力もまるでないまま二十歳で赴任、以後20年にわたって「先生」として威張り君臨する物語のようである。最後には卒業した女学生から「先生から習った悪い癖を抜くのにかかる一年かかったわ」と言われ、「先生だって月給をとって置いていつまでも師弟の礼だなんて云ふのはおかしいわ」とまで言われる。「先生」批判の物語として、自立心の強い、批判精神もしっかり持っている女性を考えていたようだ。完成させていたら賢治の童話としては異色の作品になっていただろうと惜しまれる。

また「創45」(10-455)は「禁治産」劇についての創作メモであり、ある小ブルジョアの「長男空想的に農村を救はんとして奉職せる農学校を退き村にて掘立小屋を作り開墾に従ふ/借財によりて労農芸術学校を建てんといふ。父と争ふ、互に下らず 子つひに去る。」というものであり、賢治の羅須地人協会の経験をそのまま思わせ、身につまされすぎて、書き上げることがためらったのだろうか？

ファンタジックな学校の中でも、もっとも不思議な魅力に満ちているのは「茨海小学校」ではないだろうか。野原の奥の、あるはずもないところにあるはずもない狐の小学校がある。「私は時々斯う言う勝手な野原をひとりでする。けれども斯う言う旅行をするとあと

で大へんつかれます。[…] ですから […] あんまり度々うっかり出かけることはいけません」(5-413)と語り手が言うように、空想の限りを尽くしたかのような物語である。

「最高の嘘は正直なり」「正直は最良の方便なり」といった人間界を裏返しにした格言が(狐のために)教えられている。狐のためには極めて実用的な教えであり、実用的な学校だ。「私は何だか修身にしても変だし頭がぐらぐらして来たのですが […]」(5-427)と皮肉も効いていて、賢治の語りは冴え渡っている。そこに日曜日の休みにやってきた(狐の学校では太陰暦を使っていて、月曜が休みなのだそうだ)「麻生農学校の先生」(5-420)という資格で、語り手は校長に案内され参観する。ここでも語り手の意識は、自身を「先生」としている。ただ、その先生は普通の先生ではなく、休日にも熱心に仕事をしている先生である。

狐の学校では、自分たちが生きてゆくための戦略をも教えている。そのために人間の子供を煽って養鶏を行わせることを教える。「前業は養鶏を奨励すること、本業はそれを捕ること、後業はそれを喰べること」(5-430)。ユーモラスであるだけでなく、狐にとっては極めて合理的なカリキュラムと言えよう。

極めて明晰であるように見えていた寓話も混乱させられてゆく。「で結局のところ、茨海狐小学校では、一体どういふ教育方針だか、一向さっぱりわかりません。／正直のところわからないのです。」と終わることになる。人間界の「学校」という組織が特殊だという認識を持つ賢治なのであるから、これは至って当然の感想とも言えよう。学校について考え続け、参観も行った語り手の感想はと言えば、「正直を言いますと、実は何だか頭がもちゃもちゃしましたのです。」(5-432)とすることになる。

2. 賢治が自身を重ねる先生像

このように、語りのなかにわずかに自身を重ねながら、独特の幻想的な物語を作ってきた賢治であるが、「イーハトーボ農学校の春」にはもっと直截に、賢治そのものと言いたくなるような先生を描きだしている。この作品では、幼時、少年期の回想ではなく、生徒と共に躍動する青年教師の現在進行形の日々がまず、明るさ、熱狂と共に語られる。長い間雪に埋もれていた北国に、吹き出してくるような春の訪れを、「太陽マジックのうた」として楽譜入りで歌い上げる。〈コロナは七十六万二百…〉が繰り返され、春の光と暖かさと生命の躍動を「もう誰だって胸中からもくもく湧いてくるうれしさに笑ひ出さないでられるでせうか。」(6-323)

同じ頃にかかれたと思われる「イギリス海岸」では、生徒たちと共に教室から外へ出る。生徒が関心を持った瞬間を捉えてうまく説明すること、それがうまくいったと、先生として得意気な箇所さえある。川辺での野外実習ではところを得ていきいきとする教師が描かれていて、賢治その人を重ね合わせて見ざるを得ない。一見、ぬけた様子に見えていた水泳監視の男が、実はさりげない配慮で生徒達のことを注意して見てくれたことに気づかされ、反省し、感謝の念を持つ、といったエピソードも織り交ぜられ、ナイーブな青年教師が描かれている。野外の楽しさのあまり、生徒達の水辺の危険など考えなかった引率教師としての自身を反省もするが、「もし溺れる生徒ができたなら、こっちはとても助けることもできないし、たゞ飛び込んで行って一緒に溺れてやろう、死ぬことの向ふ側まで一緒について行ってやろうと思ってただけでした」(6-344)、とやや投げやりな、「銀河鉄道の夜」などにも見られる、犠牲、あるいは自己放棄の精神もふと、顔を出す。

この物語には、宿直室で書いたこと、それを翌日生徒達に読み聞かせたことなども語られている。夏休みの農場実習の合間に、さらに希望者と共に「第三紀偶蹄類の足跡標本を採収」(6-346)に行く、と黒板に書いて告知する様子なども語られているが、現実の教師だった賢治はきっとこうだったのだろうと思わせる。また、この物語は末尾には「一九二三、八、九、」(即ち、賢治が実際に花巻農学校の教員だった時期)と記されている。この頃、川で実際生徒がおぼれ、失神したのを助けた、との記述も年譜にある。⁸⁾ 作品末尾のこの年記は執筆年月日を示すわけではなく、フィクションとしての作品の中の、指標(それもフィクション)としての年号と考えるのが一番妥当だろう。

しかしそれだけではなく、ここの「救助係」のエピソードはさらに、賢治自身の転機ともなったことを記しているのかもしれないのである。実際の賢治の生活とフィクションとの境目がただでさえ分明でないこの物語の終わり近くに、「そこで正直を申しますとこの小さな「イギリス海岸」の原稿は八月六日あの足あとを見つける前の日の晩宿直室で半分書いたのです。」(6-346)とあり、この物語が実際の経験に根ざしているように書いている。そして最初に救助係を見かけたところから「あとは勝手に私の空想を書いて行かうと思ってるたのです。ところが次の日救助係がまるでちがった人になってしまひ、」とあり、自分が救助係を見誤っていたことから、それまで少し馬鹿にしていた救助係のまるで別の面が見えてきたことを、フィクションのように語る。翌日に「泥岩の中からは空想よりももっと変なあしあとなどが出て来たのです」というのはあたかもこのことの帰結でもあるかのように記され、読者は現実とフィクションの境目がますますわからなくなるという奇妙な経験をすることになる。そのことは賢治自身が体感していたことであるのかもしれない。「虔十公園林」(6-403)の虔十をここに見ることも出来るだろう。

やはり実習を描いたものとしては「台川」がある。地質学の実習に生徒を引率し、川の中を行く教師。ずっと生徒との会話と先生が観察する生徒の様子で綴られてゆく。ここでも、説明が旨く行くかどうか、適切かどうか、生徒はちゃんと聞いているか、を気にしながら進む先生が描かれる。「教師」と生徒のやりとりを細かく記述し、歩行しながら解説しながらの、教師の内面スケッチである。ここには管理職(校長)に対する皮肉も見える。校長は少し手前で座って待っていて、すべりそうなどころへはやって来ない(6-308)。これは「イギリス海岸」に登場した校長とは少し様子が違う。「イギリス海岸」の校長は(賢治)先生に共感を示し、自らの仕事の後、「黄いろの実習服」(6-347)を着て川へ来たようである。現実面では1925年11月にはこれまでの闊達豪放磊落な校長が几帳面な校長に替わり、管理体制も強化され、賢治は不自由を感じ、農学校の教員を辞めることになる一つの原因となったことを年譜⁹⁾から知っている我々には、この描き分けにも注目したくなる。これはおとなだけではなく、生徒にもあてはまるところがあったようである。賢治の目から見て多少は脈のある生徒と、学校や授業、実習をどうでもいいと考えている生徒もいることまで語られてゆく。ストーリーらしいストーリーはなく、未完の、断片なのだろうが、賢治が教師であった時の微妙に自信の揺れる内面が描かれているようで面白い。「台川」には光りと水と(若さの)きらめきがある。良い標本になり得る

8) 文庫版の「解説」(天沢退二郎)が簡潔に示しているように、実際の大正12年8月9日は賢治は北海道樺太旅行中であり、この日付は「一九二二、」の誤記かとも考えられるが、また、一方で生徒が溺れかけたのは大正13年8月初旬(年譜は新・校本全集16巻(下)p.273-274)であるし、「一九二四、」であってもよいのかもしれない。

9) 畠山栄一郎が福島県立東白河農蚕学校長に転じ、そこから13日に中野新佐久が着任した。新・校本全集16巻(下)p.300。

実際の石、形が見つかった時の喜びも素直に語られている。自然の中の描写ではあるが、賢治にとっての「学校小説」(の断片)の重要な一部と言っていいたい。

結局賢治(満29歳)は、大正15年(1926)3月末日、県立花巻農学校を辞職するが、最後に、学生に宛てて、「生徒諸君に寄せる」(2-299)と題する次のような断章を残している。

わたくしは毎日を
鳥のやうに教室でうたってくらし
誓って云ふが
わたくしはこの仕事で
疲れをおぼえたことはない
[...]

しかし、一方でまた、この「詩ノート」に分類されている詩稿には「彼等はみんなわれらを去った」との、苦さも記されている(「断章2」)。もちろんこの「彼等」は生徒達の一部を指すだけではないだろう。賢治はここでは自身は学校を辞めてゆくという苦さもあったのか、「新しい時代」「新しい風のやうな「明日」に向かって、明日を担う若者達に呼びかけ、激励し、鼓舞し続けている。

賢治の教員時代についての証言もいくつも残されているが、¹⁰⁾ここでは現実の賢治、現実の教え子、その証言する教室風景を辿るのではなく、賢治の作品に現れてくる、時にはあまりに奇抜にも見える「学校」をもう少し見ておきたい。

3. フィクションとしての学校

「グスコブドリの伝記」に出てくる学校、教室、先生(博士)も特異で、印象的なものである。この物語には通常の教室だけでなく、主人公の勉学の様が一貫して書き込まれている。そして勉学への取り組みの姿勢も微妙に異なるし、それに呼応してか、ほとんど同じに見える「フウフィーボー成人学校」と「クーボー博士」の学校もまた、細部において微妙に異なっている。これを、「グスコブドリの伝記」の先駆形である「グスコンブドリの伝記」(共に文庫版全集8)と較べながらみてゆこう。¹¹⁾

赤髭の男の下で数年働き、そこにあった本も読んで勉強した主人公ブドリは、独り立ちするべく、イーハトーブの市に向かい、列車を降りるとまっすぐに「クーボー博士」の学校を目指して行く。しかし、「先駆形 グスコンブドリの伝記」では、この列車の車内で「せいの高い立派な紳士」に(さらに先駆形の主人公の名前である)ネネムに間違えられて話しかけられるという細部がある。この紳士はほんのわずかブドリと話ただけで、ブドリにふさわしい学校と

10) 畑山博『教師 宮澤賢治のしごと』(1988; 小学館ライブラリ29, 1992), 佐藤成(編)『証言 宮澤賢治先生: イーハトーブ農学校の1580日』, 農山漁村文化協会(東京), 1992. など。

11) 「お化け物語」としてのネネムから「グスコブドリの伝記」への改稿については、詳細かつ、賢治のテキストを読むことの意義も問いつめ、明かした、中山真彦『「グスコ(ン)ブドリの伝記」を読む』(「ユリイカ」1977年9月臨時増刊, 総特集宮澤賢治, 所収)がある。

して、「フウフィーボー成人学校」を教えてくれる。そこはフウフィーボー博士が「たった一人でやってゐる。卒業はたった九時間で毎日試験がある。それで遊んでばかりゐるものは三千回でも落第するんだ。[…]」「何を教へるんですか。」「つまり学校へはひらないで勉強するしかたを教へるんだ。」(8-525) これを聞いてブドリは我が意を得たりと言わんばかりに両手を打ち、将来に思いを馳せる。

これに対し「グスコブドリの伝記」の方では、ブドリは既に本で読んで知っているクーボー博士の学校へ行く、と決意を固めている。6年働いた沼ばたけを後にして、停車場まで二時間も歩いて汽車に乗るが、乗ってしまえば「汽車さへまどろこくつてたまらないくらいでした」と感じている。その後の農業、農作業改善の目的意識もはっきりと持ち、読者をも新天地へ急いで連れて行こうとしているかのようだ。駅を降りると自動車の往来が激しく、主人公は「地面の底から何かのん湧くやうなひゞき」を感じているし、道を訊ねても街の人たちは皆、「吹き出しさうにしながら」適当に答える。見知らぬ人だらけの「都会」に来たこと、を印象づけている。これは見知らぬ事の多い都会を不思議なものとして捉えるのではなく、疎外感を表現しようとしているかのようである。その都会の中でブドリは自力でやってゆく。ブドリは既に、しっかりした、言ってみれば優等生である。この後、黒板に書かれてゆくこともすぐに理解し、ノートも正確に取る。試問への解答も簡潔明瞭だし、勤め先を紹介され、名刺を渡されると、丁寧に礼を言う。

それに較べれば、先駆形のグスコブドリは、なんだか周囲がわからないまま、あれよあれよと火山技師になってしまったような感じもある。イーハトーブ市までの切符も「人に教へられて」(8-523) 買ったし、車中にも「銀河鉄道の夜」の初期形と同じように、主人公を導くおとながいたし、駅から学校へ行くにも、「ぼんやりしてしま」っていたのに、「いっどこで貰ったのかブドリは学校の番地を書いた書き付け」(8-526) を持っていて、これに導かれて行く。授業の後、試問に合格すると、フウフィーボー大博士は名刺をやる、と言いながらもブドリのシャツの胸に直接チョークで文字を書き込む。先駆形にはこうした、魔法的な細部がいくつもあった。物語としては十分に面白いのだが、「少年小説」の一環にと考えた賢治は、この他力本願な物語を、もっと動機も準備もしっかりした子供、というよりは青年、の物語に書き換えてしまったようである。¹²⁾

車の往来も多い、騒音に取り巻かれた都市(イーハトーブ市)に出てくる学校、教室も特異で、印象的なものである。もう少し細部も見ておこう。

「先駆形 グスコブドリの伝記」では、主人公が建物に着き、外から声をかけると、「今授業中だよ。[…] 用があるならばひつて来い」と言われるが、この時、教室の生徒たちは、「しんとしてしまひ」(8-526)、先生の勢い、権威に萎縮してしまっているかのようである。教室へ入ってみると「中にはさまざまの形をした学生がぎっしりです。」これは化け物の物語としての、さらに先駆形「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」の名残であろう。¹³⁾ 「さまざまの形」は後には「さまざまの服装」に直されている。さて、教室に入ろうとすると「向ふは大

12) 「少年小説」としての題名列記は、創作メモとして残されている。「創53, 54, 56」(10-457, 458) 参照。

13) この物語でもフウフィーボー博士の教室風景(5-283-287)が語られているが、先生は文字を「いっぺんに三百ばかり」書く、とスピードや勢いが強調されているだけで、特に尊敬に値する先生として認識されているわけではない。主人公ネネムも「名高い人なんですね」と初めて耳にしたかのようであり、熱狂する他の学生たちとは一線を画している。試験の結果は背中に白墨で書かれるのだが、「同情及[第]」(5-285)というのもあり笑いを誘う。十年間毎日落第している学生も描かれているが、これは主人公の立身出世と対比させるためだけに描かれているかのようである。主人公は書記になりたいだけだったが、この試験でその日の一等となり、博士のはからいで、突然「世界裁判長」になった。

きな崖くらみある黒い壁になってゐてそこにたくさんの白い線が引いてありさっきのせいの高い眼がねをかけた人が大きな声で講義をやって居りました。」(8-526) 初めて教室に入った者の純朴な驚きがよく表現されている。¹⁴⁾

同じ箇所が、後の「グスコブドリの伝記」では、「向ふは大きな黒い壁になってゐて、そこにたくさんの白い線が引いてあり、さっきのせいの高い眼がねをかけた人が、大きな楯の形の模型を、あちこち指しながら、さっきのまゝの高い声で、みんなに説明して居りました。」(8-250)と表現される。今度は「ブドリはそれを一目見ると、あゝこれは先生の本に書いてあった歴史の歴史といふことの模型だなと思ひました。」と即座に理解する。¹⁵⁾ 既に見たように、クーボー博士の本を読み、この人から学びたくてやって来たのである。この動機のはっきりした学生と、無為に過ごす学生との差異をくっきり浮き上がらせたのが、この建物に着き、外から声をかけ、「今授業中だよ。[...]用があるならばひつて来い」と言われた時の教室の生徒たちの反応である。「グスコブドリの伝記」では「中では大勢でどつと笑ひ」(8-250)となった。先駆形での純朴な生徒たちとの鮮やかな対比で、都会の動じない、悪く言えば、すれた学生たちが描き出されていた。

煙の種類についての最後の試問にも合格し、「きみはどういふ仕事をしてゐるのか。」「どんな仕事が好きか。」と問われると、「先駆形 グスコブドリの伝記」ではブドリは「どんな仕事でもいゝんです。とにかくほんたうに役に立つ仕事なら命も何もいりませんから働きたいんです。」(8-529)と意気込んで答えていたが、後の「グスコブドリの伝記」では「仕事をみつけに来たんです」(8-252)と答えるにとどまる。落ち着きを感じられ、静かな答えの中にも決意が感じられる。もちろんこの物語では改稿後も自己犠牲の行動は、とりわけ終盤において、淡々と語られていた。¹⁶⁾

そもそもこの物語の出だして、ブドリは孤児となり苦勞するわけだが、「先駆形 グスコブドリの伝記」ではさらにその前に、ブドリの母は町で美しい絵本を買ってきて、文字を教育するという箇所があった。そうしてブドリは「かくこうどり、こゝを通るべからず」と書けるまでになっていた。ところが後の形「グスコブドリの伝記」では、森の中に生まれたブドリも十歳の時まで学校に通っていたことになっている。先駆形では「学校」ではなく、母親から直接文字を習うということになっており、教育の一つの理想が具現されていた。しかしこの暖かな、愛情に満ちた導き、教育は「グスコブドリの伝記」にはない。そこでは学校教育がどのようなものであったかは語られていないが、主人公は先駆形に較べればはるかにしっかりしている。受け答えも優等生的にそつがない。人生の目的意識まではっきりしている。すなわち、働きながら勉強すること。勉強のみではなく、また、立身の夢ばかりでもない。どちらか一方ではなく、働くことと勉強することの両立、賢治自身が考え続けていたことがここに反映していると言えよう。

14) 高橋世織『感覚のモダン』、「賢治と黒板」の章 (p.164-165など) では、教室で使われるメディアとしての「黒板」について卓見が示されている。

15) 「歴史の歴史」は「銀河鉄道の夜」初期形では「黒い背の高いおとな (ブルカニロ博士)」が語っていた。「銀河鉄道の夜」四次稿では削られたが、ここではまだ保たれている。

16) また、試験についても、出題が煙の種類についてであったり、評価も白墨でえりに書くという風変わりなやり方であり、現実の試験制度、あるいは学校制度を揶揄しているようであり面白い。ただ、「先駆形 グスコブドリの伝記」では「合、不可、退校」だったのだが、「グスコブドリの伝記」では「退校」も「不可」もなくなり、「再来」「奮励」となっていて、合否よりも学生を励ます方向になっている。だからこそ「同じ講義をもう六年もきいてゐる」学生もいるのだが、このことも賢治の、都会の学生に対する反感、あるいは皮肉なのかもしれない。賢治の改稿の仕方は、非現実の笑いの世界を、細部ではより現実的な世界に書き換えようとしているようである。

4. 農学校教師と学生の視点

毎日を「鳥のやうに教室でうたつてくらし」農学校教員時代の賢治作品の一つの頂点は、「修学旅行復命書」(10-497-503)であろう。大正13年5月18日から23日までの二年生の北海道修学旅行引率の報告である。ただの事務的な文書ではなく、端正な文体で、教員としての悩みと希望がすべて手に取るようにわかる。北大を訪問すると花巻出身の総長(佐藤昌介)の歓迎を受け、牛乳1リットルを飲まされたと、苦笑を禁じ得ないようなエピソードも語られるが、札幌に理想的な「都会」を見出し、芝生の上ののびやかさ、自由を生徒と共に感じ、大通りや公園を歩く解放感、明るさも語られ、土壌の改善や、農業そのものについて省察を重ねる、すばらしい文章である。「ポラーノの広場」の発想もここにあるのではないかと思われてくる。

また、これまでとは異なる視点として、教師ではなく学生の視点から「学校」を見る、「或る農学生の日誌」という作品も作られる。¹⁷⁾ 農学校三年生以降のこと、春になった時の気分、先輩後輩、嫌な先生、北海道旅行(参加の難しい家庭の事情、二年連続の不作)、肥料設計、土性調査、地質調査。田に水を順に引くにしても、上流でその水を自分の田に入れてしまうずい大人のエピソード等々、賢治の実生活にあったもので構成されているようだ。この作品も日付を持っている。日誌は1925年4月1日に始まり、飛び飛びに続き、1927年8月21日、自分で設計した肥料でも、雨で稲が急にだめになってしまい、学校の先生に相談しようにもその無責任な様子が思い出されて、頼りにならない、と絶望的になるところで終わる。何とも苦い結末である。天候だけでなく、教師が全く頼りにならないことがストレートに記されている。

天沢退二郎は「この「日誌」自体、書かるべかりしリアリスティックな少年小説のためのメモあるいは材料のように思われなくもない」と記している。この作品と関連する創作メモには「黎明行進歌」があり、これによれば17歳から19歳までの3年間を月ごとに順次描いてゆこうとしていたようである。¹⁸⁾ 実現していれば、他の「少年小説」以上に、学校と密接に関連しながらの物語になっていただろう。

現実の教師を退いたのが1926年3月であったが、これと呼応するかのようには、「一九二七、三、二八、」という日付を冒頭に持つ「1019 札幌市」(「春と修羅 第三集」2-67)という詩においても、

開拓記念の楡の広場に
力いっぱい撒いたけれども
小鳥はそれを啄まなかった

17) 視点を変えていると言えば、「フランドン農学校の豚」も農学校を舞台としながらも異色の作品である。触媒(白金)としての豚について教える畜産学の先生が描かれ、自身が解体され人間に使われる豚の恐怖が描かれる。この国の新しい法では、家畜の屠殺のためには「死亡承諾書」(7-136)をとることが必要となり、豚も捺印を迫られている。校長が交渉に来て失敗するが、開き直って学校の御陰で生きてこれた、との説教を展開する。そして翌日に死を控えた豚の気持ちが綴られる。全体主義の臭いが漂うこの物語は「ウルトラ大学生」(7-144)に話しかけるような体裁をとっている。

18) 文庫版全集7、「解説」p. 604。「黎明行進歌」は「創26」(10-439-441)。

と書き残している。物語の中のセングードやモリーオが都市としては漠然と描かれているのに比して、札幌はくっきりと地理が浮かび上がってくるような気がするのなぜだろうか。それだけ公園や都市計画の印象が賢治にとって強かったのではないだろうか。大正12年夏には北海道を通過して樺太旅行をし、大正13年5月には修学旅行を引率し、この時は生徒と共に大通公園を歌いながら歩いた、とも言う。

賢治は「新しい学校」のアイデアというか希望は、高等農林卒業の頃から持っていたと思われる。どこまで具体的かはわからないが、少なくとも思い描いてはいたし、「只私共自身がやがて学校を造るときまで」とか、「私共が新文明を建設し得る時は遠くはないでせうがそれ迄は静に深く常に勉め […]」などと友人に書き送っていた。¹⁹⁾そして、希望と、さまざまな経験と、失望と、挫折を経て、いよいよ学校を離れた時も、すぐ翌日に「岩手日報」に載ったインタビュー記事「新しい農村の建設に努力する／花巻農学校を辞した宮沢先生」(大正15年4月1日)では、「現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてゐるやうに考へられます。そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であつた『農村経済』について少し研究したいと思つてゐます。 […]」と語っており、決して学校(ここでは大学であるが)に全く失望しているわけでもなかったのである。²⁰⁾

5. 結 語

「春と修羅 第三集」を読むとこの時期の賢治の気持ちがわかるように思える。「1082 [あすこの田はねえ]」(2-118)は「一九二七、七、一〇、」という日付を持つ。

これからの本当の勉強はねえ
テニスをしながら商売の先生から
義理で教はることでないんだ

最初、昭和3年に雑誌「聖燈」に発表された時には「稲作挿話」と題されていたものである。「ポラーノの広場」の、後になって削除された「6. 風と草穂」にあったレオーノ・キューストの言葉をも思い出させる。²¹⁾

また、「一九二七、四、二一、」の日付を持つ「1042 [同心町の世あけがた]」(2-88)には、「われわれ学校を出て来たもの／われわれ町に育つたもの／われわれ月給をとつたことのあるもの／それ全体への疑ひや／漠然とした反感ならば／容易にこれは抜き得ない」とある。この痛烈な負い目、自己批判は、学校を離れ農業に入ったつもりでいた賢治が、農民と並んで歩いても、その嫉視に遭っていることを意識してのものである。賢治が「リアカー」を轢いても、そのリアカー自体が当時としては高級なもので妬みの対象であったとも言われている。²²⁾

しかしそのような状況にあつて、この言葉も決して単に自分を責めるだけの被虐趣味などで

19) 書簡番号49, 保阪嘉内宛, 大正7年3月14日前後; 書簡番号50, 保阪嘉内宛, 大正7年3月20日前後。

20) 新・校本全集16巻(上), 「年譜」p. 311-312, 16巻(下)「伝記消息」p. 357-358。

21) 7-579. 拙稿「ポラーノの広場はどこにあるのか—宮沢賢治と近代」, 「アジア文化研究 別冊6 日本の近代化と脱近代化」(国際基督教大学学報Ⅲ-A), 国際基督教大学アジア文化研究所, 1995. p. 97-114を参照されたい。本稿はこの「ポラーノの広場」論への補注の意味も持っている。

22) 例えば, 井上ひさし・こまつ座編著『宮沢賢治に聞く』(1995), 文春文庫, 2002. p. 252。

はない。理解と無理解を痛感し、そのようなすれ違いを解消することの必要と難しさに呻吟している賢治がここにいる。そうしてその中で、責任と自覚を刻み直している。羅須地人協会の試みは賢治自身の体調の問題もあって中断を余儀なくされたが、学校以外の枠組みで、労働と勉学を調和させ、生活を成立させ、若者の成長、育成の枠組みを作ろうと試み続けた賢治は、町の学校とは無縁の「ポラーノの広場」に行き着いたと言えるだろう。

参考文献

- 『宮沢賢治全集』（全10冊），ちくま文庫，1986-1995。
『新・校本 宮沢賢治全集』，全16巻（索引巻のみ未刊），筑摩書房，1995-2001。
高橋世織『感覚のモダン』，せりか書房，2003。
佐藤成（編）『証言 宮沢賢治先生：イーハトーブ農学校の1580日』，農山漁村文化協会（東京），1992。
藤根研一『農業技師「宮沢賢治」』（賢治スピリッツ4），自費限定版（盛岡），2003。

（本研究は文部科学省の科研費（課題番号16652013）の助成を受けたものである。）